

2016年7月29日

# 日本との出会い

名前: 唐春苓

中国の大学: 湘潭大学

学部: 外国語学院

日本の大学: 鹿児島大学

学部: 教育学部

## はじめに

私は2015年10月に日本語・日本文化研修生として中国から来た。

日本に来る前、湖南省湘潭大学外国語学院日本語科で勉強した。日本語科は言語の専攻なので、ほかの専攻と比べると、学生はあまり多くない。しかし、全国的に見れば、英語を除いて、日本語は学ぶ人が一番多い言語のひとつである。それは日本が中国に近く、同時に漢字を使う国であるからだろう。日本語が専門だから、日本語の語彙や文法などの言語知識だけを学ぶと思われがちだが、実際には、日本の文化、文学、歴史なども勉強しなければならない。それに、翻訳やビジネス日本語など実用的なコースもある。



湘潭大学は中国で日本語という専攻を一番早く開設した大学のひとつである。毎年日本語の優秀な人材をたくさん育成してきた。したがって、湘潭大学日本語科の就職率はいつも高い。私の先輩たちは卒業した後いろいろな仕事をしている。日系の会社に入って、翻訳や通訳をしている人や、日本語の先生になった人もいるし、日本語を使うほかの仕事をしている人もいる。私は、今もう4年生だが、これから大学院で続けて勉強したい。そのあと、日本語を生かした仕事につきたい。

私が日本語を専門として選んだ理由のひとつは日本語科の就職率が高いからだ。それだけでなく、私はもともと言語を勉強するのが好きだ。高校時代に英語の勉強も好きだった。大学では新しい言語を学ぼうと思って、日本語を選んだ。どうしてほかの言語ではなく、日本語なのかというと、中国と文化的にも歴史的にも多くの触れ合いがある国を深く理解しようと思ったからである。そして、その時から、将来機会があればきっと日本に行って、自分の目で日本を見たいと思っていた。

そして今、私は現実に日本にいる。日本で生活して、勉強して、鹿児島文化を体験している。日本は私が来る前に本で知っていた日本、あるいは先生が紹介してくれた日本とほとんど同じだと感じた。だから、日本に来てすぐ日本の生活に慣れた。そうは言っても、日本に来るのは初めてで一人で故郷を離れて、海外に出るのだから、来る前にはいろいろ心配していた。しかし、来てからそんな心配は必要がないと分かった。なぜならば、この人たちは皆親切で、進んで私を助けてくれたからである。困難な時に私に援助の手を差し伸べてくれた先生や友達に心から感謝している。

それから、今まで、私は日本でやりたいことをほとんどやった。一人で遠いところに行くことや、いろいろな観光地を楽しむことや、外国人の友達を作ることなど。それに、日常生活もいろいろ体験した。例えば、歯医者さんのところに行くとか、美容室に行って髪

を切るとか、コンタクトレンズを作るとか。新しい体験が終わるたびに、心に満足感が広がる。「なるほど、日本でこんなことをこういうふうにするのか」。このように、毎日少しの喜びが増えるなか、日本で楽しく過ごしてきた。

あっという間に一年間が過ぎてしまった。しかし将来、ここでの体験は私にとって必ず貴重な経験になる。日本に来られて、日本の生活が体験できて、日本の社会が理解できるようなこのチャンスをもたらえて本当にありがたいと思っている。また日本に来る日を楽しみにしている。

## 屋久島—大切な思い出

2016の秋学期が始まって間もなく、先生に11月に屋久島に研修に行く活動があると聞いた。実は、最初この知らせを聞いたとき、私は特に行きたくはなかった。屋久島はいつも雨で、私たちが泊まる場所もそんなによくないと聞いたからだ。それに行く前はポスター発表の準備をしなければならないので、ちょっと面倒だと思った。しかし、これもありがたい交流の機会じゃないか。しかも屋久島は世界遺産であるのに、どうして見に行かない？そう思うようになり申し込み、積極的に準備した。

26日、私たち14人が旅の第一歩を踏み出した。途中、みんなは興奮していて、話したり笑ったりして明るい雰囲気だった。私もこの雰囲気に影響されて、とても気持がよかった。この気持がフェリーに乗るまで続いていた…。私はあまり船酔いしないが、その日、天気が悪く、少し雨が降っていたから、波が高くフェリーもすごく揺れていた。だから一時間たった後、気分が悪くなった。でも先生とクラスメイトに迷惑をかけたくないからずっと我慢していた。そのあと本当に我慢できず、吐いてしまった。しかし感動したのは、乗務員のお姉さんが優しく私を世話してくれ、先生とクラスメイトも私のことを心配してくれた。このことが過ぎたあと、私たちは順調に屋久島に着いた。

一日目、まず文化村センターに行って、屋久島に関することをいろいろ習った。それから、千尋滝に行った。これは私たちが屋久島に来てはじめて見たスポットであった。私たちが屋久島の自然の魅力をはじめて感じた。V字谷の中に、垂直に落下する滝は白い絹織物のようだった。その時期は渇水期だったから、水の量がそんなに多くないように見えるが、遠く離れてもその水の音が聞こえて、水しぶきもたらした涼しさが感じられるようだった。もっと遠いところを眺めると、そちらはうねりながら長く続く山並みだった。目に入るのはすべて緑で、青い空と白い雲がお互いに引き立っていて、私もなんともいえない、いい気持ちになった。



千尋滝



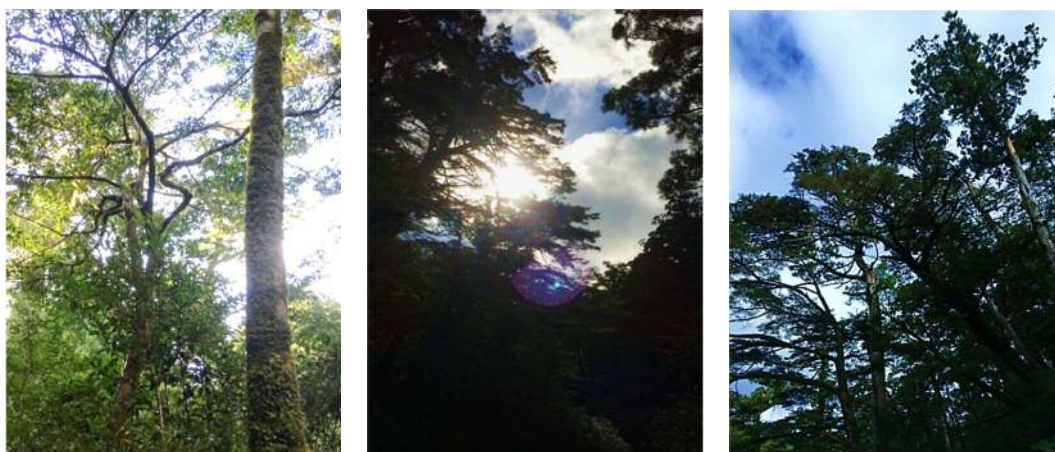
ハエトリグサ

道中、スタッフの方がたくさん面白い植物を紹介してくれた。もし道の傍らに変な形の花を見ても、不思議だと思わないで。ひょっとしたらそれはハエトリグサかもしれないよ。



夜、泊まるどころに来た。実はその部屋は私が想像したほど悪くなかった。逆に快適だと思った。私たちは一緒に懇親会に出て、屋久島環境文化研修センターのスタッフといろいろ交流した。彼らの中に、地元民ではない人が何人もいる。でも彼らは屋久島に対して情熱を持っていて、環境の保護に力を尽くしたいので屋久島に来ることを選んだそうだ。私は彼らの話感到非常に感心したと同時に、感動していた。

二日目は忙しかった。朝早く起きてから、ヤクスギランドに入って自然の体験がはじまった。森の中に行けば行くほど心が揺さぶられた。それは言葉で言えないほどの美しさであった。誰でもその中に身を置けば、絶対に大自然の神の技に感嘆を禁じ得ないだろう。



ヤクスギランド

やっと本番になった。中央中学校に来て生徒たちとの異文化交流をする予定だ。私たちが学校に着いたときは昼ご飯の時間だった。外にそれほど多くの人がいなかった。でも、運動場を歩いていた時も、教室にいる学生たちが私たちに手を振りながら挨拶してくれた。本当にかわいい学生たちだった。それからポスターの発表をした。私が発表したのは中国の八大料理だった。時々日本語が詰まってしまうから、説明が十分ではなかったが、生徒たちが思いやってくれて、頑張って私の話を理解してくれた。ご苦労だったね。説明のとき、質問がありませんかと聞いたら、学生たちがあまり質問しなかった。私がなにか彼らに聞いたら、みんなも黙っている…。やっぱり恥ずかしがり屋だね。これも私に自分の中学校時代を思い出させた。授業を受けるとき、私もそういう状態だった。そのとき先生はすごく困っただろう。そうは言っても、彼らと一緒に本当に楽しかった。そして、私のグループはクイズのコーナーで最後の優勝は得られなかったが、みんなは協力して頑張ったから、それだけで十分だと思う。

夜になったら、スタッフさんがみんなを連れてナイトハイクをした。夜空の下に、みんなは話もなく、ただ歩きながら、静かに自然の音を耳を澄まして聞いた。それは本当に神妙な感じだった。もともと星空観察の計画だったが、その晩星が見えなかったので、腹をわって懇談することになった。みんなは芝生に座って、各自の考えを話した。同じような話もあれば、違う話もあった。私たちはいろいろ話した。そんな夜に、そんな雰囲気、みんなが静かに座って、空を見ながら、考えたり感じたりする場面は、今思い出しても、胸に熱いものがこみ上げてくる。これは縁かな。私たちが世界中からこ

の地に集まって、お互いに出会い、知り合いになったことは運命かもしれない。

三日目、地元の村を見回って、郷土料理を食べ終わって、この2泊3日の研修旅行が終わった。しかし、研修の終わりは別れも意味している。帰るときにみんなは屋久島の風景にも、屋久島の人たちにも別れを惜しんだ。短い三日間だけで、しかも中央中学校の生徒たちと一緒にいた時間は3時間ぐらいだったのに、どうして私はそんなに名残惜しかったのだろう。これからもう会えないというわけでもないが、特定の時間に、特定の場所で起ったその特別なことはもう二度と現れないから、私はこの唯一の記憶を特に大切にしたかったのだろう。学生たちとの交流でも、仲間たちとの懇談でも、時間は長くなかったが、確実に私たちの心を近づけた。もともと人間のつながりはそういうふうに形づくられてきたのではないかと思った。その時になって、私がこの研修に参加してよかったと思った。もし参加しなかったらとても後悔しただろう。

今度の研修旅行は私が日本に来て初めての短期旅行だった。先生とクラスメイトと一緒に屋久島の自然を感じて、おいしい料理を味わって、歴史文化を勉強することができたのは私にとって幸せなことだった。学校に戻って間もなく、中央中学校の生徒たちのメッセージをもらった。このメッセージを見て特に感動した。今度はただ浅い異文化交流だったので、これから中国と日本がもっと深い文化交流ができるように頑張りたい。



中央中学校の生徒たちからのメッセージ

この旅行は本当に忘れられない体験だった、機会があればきっともう一度屋久島に行く。

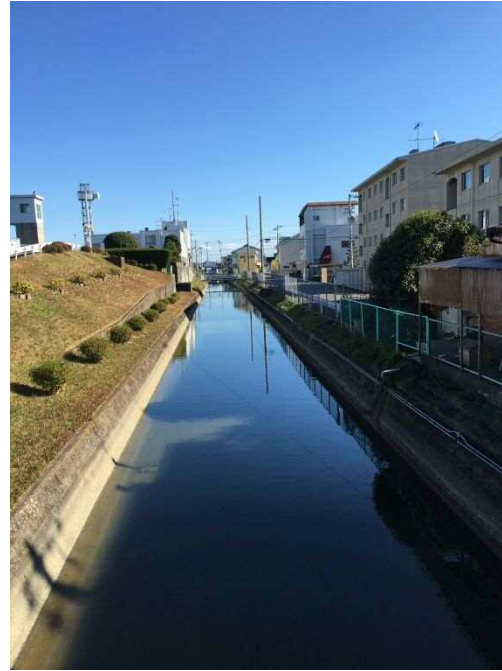
## 縁があれば千里を超えてまた会える

中国でまだ大学二年生の時、湘潭大学に一人の留学生が来た。彼女は交換留学生として四国大学から来た。私は彼女を愛ちゃんと呼んでいる。四国大学は、鹿児島大学と同じように湘潭大学の姉妹校だ。それまでは、毎年3、4人来たが、その年は彼女一人だけ来た。それはそのときは日本と中国の関係が最悪の時だったからかもしれない。最初、こんな微妙な時期に一人で中国に来るのは怖くないのかと聞いたかったが、不愉快な思いをさせないようにできるだけ日本人と政治的な問題を話さないほうがいいと先生に言われていたので、結局、日本人はあなた1人ですが、寂しくないですかと聞いた。「周りに日本人がいなくて、何でも中国語でしか交流できないから、自分の中国語のレベルをもっと早くアップできます。こう考えると、このままでいいと思います」と彼女は答えた。そのあとは、彼女が言った通りになった。愛ちゃんは初めて中国にきたとき、中国語がなにも話せなかったが、一年たったあと、もうなめらかに中国人と交流できるようになった。これも彼女が努力した結果だと思う。

愛ちゃんが中国にいたとき、私たちは友達になった。普段、いつも一緒にご飯を食べたり、勉強したりしていた。彼女は私に徳島の阿波踊りを教えてくれた。端午の節句、私は彼女を連れて、故郷に帰り、ドラゴンボート競漕を見た。お互いを通して、相手の国の文化をいろいろ習ったと思う。そのあと、彼女はいよいよ日本に帰らなければならない日が来た。そのとき、もし私が日本に行く日があつたら、きっと愛ちゃんに会いに行くと約束したのだが、実は日本に行くチャンスが少なく、これでもう会えないかもしれないと思った。そう思っていたら、意外にも日本へ留学に来る機会をもらった。これは縁だろう。私たちが再び会うことは運命づけられている。

それで、冬休みに、四国に行った。ちょうどそこに留学しているクラスメイトがいるから、泊まる場所を探さなくてよかった。日本で初めて一人で遠いところに行くから、とても緊張していた。自分は方向音痴だから、バスに間違っ乗ったり、道に迷ったりしないかを心配した。しかしそういう自分を自覚していたから、十分に準備していった。幸い、目的地には順調に着いた。

12月30日に、まずクラスメイトに連れられて四国大学の近くをちょっと歩き回った。中国にいたとき、愛ちゃんに徳島の写真を見せてもらったこともある。そのときに徳島はきれいなところだと思った。今回自分の目で本場を見ると、やっぱりそうだ。徳島は小さい県で、人口があまり多くなくて、静かだ。田舎だからこそ、空気がきれいで、川の水も透き通っている（でも私はやっぱり鹿児島がもっと好きだ）。ところで、日本に来てたくさんのところに行ったことがあるが、どこもきれいでさっぱりしている。これも日本人の強い環境保護の意識のおかげだと思う。



徳島の道と川

12月31日は日本の大みそかだ。この日に会おうと愛ちゃんと約束した。午前10時、彼女は車で私を迎えに来た。愛ちゃんの家に入ったとき、私はわくわくしていた。初めて日本人の家に行くから、気がつかないうちに失礼なことをしたらどうしようと心配していた。彼女の家族が私のことを気に入らなかつたらと思うと怖かった。でもそのとき愛ちゃんの両親は家にいなかった。ただお婆さんが家で待っていた。ちょっとだけほっとしていた。お婆さんはとても優しい人だ。食べ物をたくさん持ってきて私を歓迎した。大晦日なので、幸運なことにお婆さんの手作りのお節料理を食べた。ご飯の後、一緒に話したが、愛ちゃんが中国に留学した時のことを聞いた。愛ちゃんは中国語がうまいですねと言ったら、お婆さんもそうそうと言いながら、愛ちゃんの中国語スピーチコンテストの賞状を見つけ出して、私に見せた。お婆さんは明らかにこれを誇りとしていた。実は愛ちゃんは恥ずかしがってずっと「いいから」と言ってお婆さんをとめようとしていた。それから、お婆さんは家にあるハンカチと手作りの小物をいろいろ探しだして、私にくれた。そんなものたくさんあるから、使いきれないと言っているが、私はその好意を感じた。

最初家に入ったときはまだ気兼ねしていたが、だんだん親近感を持つようになった。こんなお婆さんを見ると、自分の家族の年寄りを思い出したからだ。彼らもこういう感じだ。子や孫の何でもない業績でも、彼らの誇りになって、みんなに知らせたい気持ちだ。客にもとても熱心で、自分がいいと思うものを全部あげたいと思う。こんなことを思い出して、一つの考えが頭に浮かんだ。「なんだ。世界の年寄りみんな同じだ！」

夜になって、愛ちゃんのお母さんも帰ってきた。晩ご飯を一緒に食べた。その温かい雰囲気は自分の家にいるような感じだった。前は愛ちゃんの家族と一緒にいる場面もいろいろ考えたが、こんなに自然だとは思わなかった。愛ちゃんの家族と出会えてよかつ



た。

久しぶりに会ったから、私と愛ちゃんもいろいろ話した。気が付かないうちに中国と日本の国際関係に触れた。最初この話題に触れるとき、私は続けて話すかどうかためらったが、愛ちゃんの特別な反応がない様子を見てから、安心した。私たちは現実に対して自分の考えを客観的に表した。お互い相手の観点が理解できた。どの国家にもいい人と悪い人がいる。一部だけを見て全体を否定することはよくないのではないか。実は日本に来てから、たくさんの日本人と話したことがある。若い人もいるし、年上の人もいる。でも話すとき、みんな意識的にこの話題に触れないようにした。このことがタブーのように、触れるとやばいことが起こるみたい。でもそうすればするほど、問題が埋もれて、ギャップもだんだん深くなっていくのではないだろうか。愛ちゃんが中国にいたとき、私たちと話するときも細心の注意を払っていた。この話題を話せば相手の気にさわるのではないかと心配していた。しかし今、気軽にこの話題を話せるようになった。たとえ二人の観点が違うとしても大したことではない。相手の考えを尊重すればいいと思う。これは本当の友達ではないか。前は二人の中にまだ何か隔てるものがあったが、今は率直に付き合うことができる。

一年あまりたって、私たちが会えたのは喜ばしいことだ。これは「縁があれば千里を超えてまた会える」ではないか。長い時間がたっても、私たちの仲は疎遠になっていない。逆にもっと親しくなった。時間も距離も私たちの友情を薄めなかった。この友情がずっと続いていくと信じる。私たちのような異国の友情が永遠に続きますように！



私のルート： —————

愛ちゃんのルート： —————

## まとめ

このまとめを書かなければならない時がついに来た。それは私がもうすぐ帰国しなければならないことを意味している。そう思ったら、心情も複雑になった。中国に帰りたくないというわけでもないが、日本で過ごしたこの一年間は確かに楽しくて充実した一年間だった。日本語・日本文化研修生として日本に留学に来られたのは私の大学生時代で一番意味があることだと思った。

この一年間のことを顧みると、大きな変化があったと気付いた。昔、私は未知のことに対して非常に臆病な人間だった。だから、そんな時が来るたびに、いつも身の回りの家族や友達を頼りにした。初めて日本に来たとき、ここのすべてが私にとって未知のことだった。でもそのとき、何でもほかの人に頼むわけにはいかないだろう。それで、自分の恐怖心を克服して、自分ひとりで未知のものに挑戦することをだんだん習得してきた。今、未知のことに対してまだ怖くても、せめてほかの人に頼らず自分ひとりで勇敢に新しい物事に挑戦することができるようになった。これは自立能力の向上だけではなく、成長の一步とも言えるだろう。

日本に来てから、優秀な人達にもいろいろ出会った。彼らと付き合っているうちに、私ももっと自信がもてるようになった。以前、有名な大学に合格できる人達はきっと私よりずっと頭がいいという考えを持っていた。しかし、日本に来てから、多くの留学生が自分の努力で有名な大学に入ったことを見つけた。同じ留学生なのに、彼らができることをどうして私はできないのかと自問して、いや、私にもできる！そうして、昔は難しいと思ったこともそんなに難しくなくなった。努力すれば、ある日きっと自分の夢が叶うことがわかったからだ。

また、自分の国を出てこそ世界は一体どんなに広いのか本当にわかるのだ。それは絶対世界地理を学んだときに感じた広さではなく、世界各国から来た人が自分の国のことを話し合うときに感じた世界の広さだ。母国と違う国に来て、自分の視野も考えも大きな変化があると思う。もっと多くの人と接触できて、自分の国で体験できないことが体験できる。それから、思想の限界も拡大される。自分の国ではないから、話し方や行為や考え方も国際的基準になる。そうすると、帰国しても、そういう考え方が残る。これは目先があまりきかない昔の私にとっていい変化だ。

日本でたくさんの人と知り合って、自分がしたいこともいろいろした。日本で私は成長したし、進歩もあった。日本で私はもっと優秀な私になった。帰国してから私は斬新な私になって未来の生活を迎える。この一年間のことも私が一生忘れない体験になると思う。

〈添付：屋久島異文化交流セミナーでの発表資料〉